

JIS X 0212 は、JIS X 0208 と同時に運用するための漢字コード規格です。JIS X 0208 に含まれない漢字、アクセントつきラテン文字・ギリシャ文字、記号類等の集合を定め、それぞれの文字に符号化表現を与えています。

構造

ISO/IEC 2022 に整合的な 2 バイト符号化文字集合です。従って、ISO/IEC 2022 の枠組みに則って、JIS X 0208 と組み合わせあるいは切り替えて用いることができます。例えば、EUC-JP ではシングルシフトコードによって GR の文字集合を JIS X 0208 と切り替えたり、ISO-2022-JP-2 ではエスケープシーケンスによって指示して使うことができます。

符号化

ISO/IEC 2022 の枠組みのもとで使うことのみを意図しており、Shift JIS の符号化で用いることはできません。これは JIS X 0212 が普及しなかった大きな理由と考えられます。このことから、Shift JIS 方式の符号化も可能な JIS X 0213 が開発されることとなりました。

なお、Unicode で JIS X 0212 に対応したと主張する製品もありますが、それは Unicode に JIS X 0212 の文字が全て含まれているというだけのことで、JIS X 0212 という文字コード規格に対応しているわけではありません。

制定・改正履歴

1990 年に制定されて以来、一度も改正されていません。JIS の文字コード規格は 1990 年代半ば以降、ISO の国際規格と整合するように標題や規定内容が修正されていますが、この規格についてはそうした措置もとられていません。

JIS X 0208 との関係

JIS X 0212 は JIS X 0208 にはない文字を集めたものですが、一部に不整合な点があります。JIS X 0208 の非漢字の領域にある「ㄨ」を漢字として収録していたり、83JIS の字体変更によって消えた字体を復活させたもののうち一部が漏れていたりします。また、JIS X 0208 が本来意図していた、現代日本で使われている文字を符号化するという目的からすると、アイヌ語表記に用いられる片仮名や地名に用いられる漢字など、明らかな欠落が認められます。

この JIS X 0208 との不整合は、のちに JIS X 0213 が開発される理由のひとつとなりました。

JIS X 0213 との関係

JIS X 0213 は JIS X 0212 と同時に運用することは想定されていません。JIS X 0213 は JIS X 0212 とは全く別に (X0212 の失敗を認めて)、改めて JIS X 0208 を補完する目的で開発された規格です。このため両者には重複する文字が多くあります。

JIS X 0213 の漢字集合 2 面は、JIS X 0212 において文字の割り当てられていない区点位置に文字を配置しています。これによって、EUC 形式の符号化において、JIS X 0213 か JIS X 0212 かを見分けられるようになっていきます。

関連項目

- ・ JIS X 0208
- ・ JIS X 0213